

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2019年度 助成者)

作成日 2019年11月9日

氏名 (フリガナ)	山岡 由佳
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2019年10月27日(日)～ 11月2日(土)
所属機関名	愛媛県立中央病院
身分	技師

【はじめに】

私がこの研修に参加した理由は、看護師として働くなかで、その治療の選択にその人、また家族においてもそれが最善の選択であったのか、また他に選択肢はないのだろうかと考える場面があり、看護師で患者と関わる時間が長い自分が、視野を広げ、別の視点から話ができたり、今ある価値観をより良いものにしたいと思い参加した。

そこで、本レポートでは、上記期間の研修を通して感じたことや、自分が今後どのように看護師として働きたいと感じたか記載する。

すべての研修を通して強く感じたことは、文化の違いからくる価値観の違いであった。それに伴う国の制度や生活背景の変化がとても大きく影響していると実感した。

看護師をはじめとする医療従事者の仕事に対する姿勢が日本とは異なり、まずとても専門性に富んでいる、加えて個人が自分の仕事の範囲でできることを発揮また能力を向上させ、他職種と多くの関わり・連携を行いその中で患者へ必要な医療を検討・提供するということが実現しているということがとても驚きであった。

私たちも、学ぶ姿勢は同じようにあるが、より専門的に知識を深め、資格取得してからもさらに向上心を持っているところにとっても感銘をうけた。

尊厳死についての講義については、私自身急性期病院で働いていると加療したい希望があるがそれが、本当にその人の希望で最も良い選択であるのかということをよく考えることがあり、とてもジレンマに感じていた。事例や薬剤の処方・使用率などを聞いて、少し想像していた結果とは異なっていた。処方された薬剤はほぼ全員が摂取されるものだと思い込んでいたため、このような考えも自己の視野が狭さを考えさせられる場面であった。病院から在宅への移行で密なコミュニケーションを図り、信頼関係を築くことの大切さや必要性を再度認識する機会になった。

少し話がそれるが、現地の看護師さんの講義では、その方たちの現在までの経緯を伺うことができ、とても印象的であった。そして、日本人の感覚からの考えも話してもらい、州に住む人柄を話からも垣間見ることができとても特別な時間であったように思う。

例えば飲食店でも迷っていると優しく声をかけてくれる人や日本語であいさつしてくれる人もいてイメージとは異なり、日本にいるときには深く考えていなかったが、その土地にいる自分が外国人である事に気づき、日本で仕事をしている時に自分も、ギブギブの精神でコミュニケーションをとれるようになりたいと思えた。この発想はいままで自分の中では生まれることは、ほぼなかつことで、5日間の短い研修でも、とても充実した時間を過ごすことができた。

今後は、今自分がしている仕事ややりたい事に関して固まった考えではなく、少し視線を変えて考える習慣をつけたいと思う。また、定期的に海外に行き、新しい情報と取り入れるようにしたいと思う。